

突然のお手紙失礼します。日経社内のモラルの低下に、多くの社員がやる気を失っています。以下の事実を告発します。

編集局内を憂鬱にさせている最大のものは、喜多社長の愛人問題です。愛人は吉田ありさ（平成元年入社。現在50歳）といい、喜多が米州総局（ニューヨーク）でデスクをしていた時代に現地採用しました。吉田は夫と離婚し、喜多は日本に戻る際に連れて帰り、本社採用にして東京経済部に配属させてしまいました。年齢制限に引っ掛かるにもかかわらずです。言うまでもなく、経済部は日経一のエリート集団です。

吉田が優秀で部内の人望があれば、個人的な事情などどうでもいいのですが、例によってそうではありません。はっきり言って記事は書けないし、キャップとして担当していた厚生労働省クラブもまとめられませんでした。にもかかわらず、吉田はロンドンに特派員として送られました。喜多は当時、専務になっていました、喜多との愛人関係を知りつつ、その人事を所長部長として実現したのが当時の東京経済部長の長谷部剛です。その後、経営企画室長となり、次期株主総会で、常務に出世します。

ロンドン時代も吉田は堪能でした。現地のデスクが記事をほとんど書き直し、本来なら記者失格のところ、経済部に異動し、デスクになってしまいました。編集局長や経済部長は喜多の言いなりで人事を決めています。今春の人事で吉田を経済部から出そうという案が検討されましたが、喜多の意をくんだ編集局長の岡田がその案を却下しました。今春の人事は別の面からも編集局内を憂鬱させています。女性の部長登用が相次いだのです。もちろん実力が伴っていれば男も女も関係ないのですが、そのいずれもが納得できるものではありません。局内では「吉田ありさを2年後に経済部長に据えるための赤石」との見方がもっぱらです。日経では女性部長はまだ珍しく、実績をつくっておこうというわけです。2年後は彼女の入社年次が部長に上がる年なのです。

組織で一番大事な人事が、社長が愛人を引き立てるために行われているわけです。日経の社長は歴代、問題を起こしていますが、またかという思いです。真面目に働きといわれても無理です。編集局長も、編集局の幹部も、役員もすべて問題の所在を分かっています。しかし、社長に意見できません。飛ばされてしまうからです。

さらに、今春の人事は真面目にやっているものを落胆させました。犯罪者が出世階段をまた上がったのです。2008年に公営執行妨害で警視庁神文谷署に逮捕された斎藤仁志が専任の編集局次長に上がりました。昭和58年入社の実績があります。斎藤の後任の電子本部長について松本元裕（昭和60年入社）もすねに傷を持っています。彼も同類のトップランナーです。ニューヨーク支局に駐在中の10年以上前に現地で不倫関係にあったニューヨーク支局の現地採用の女性に自殺されています。こんな問題のある連中ばかり出世していくのです。いったい、日経という会社はどうなっているんでしょう。上記の事実をぜひ、世に語りていただきたい。